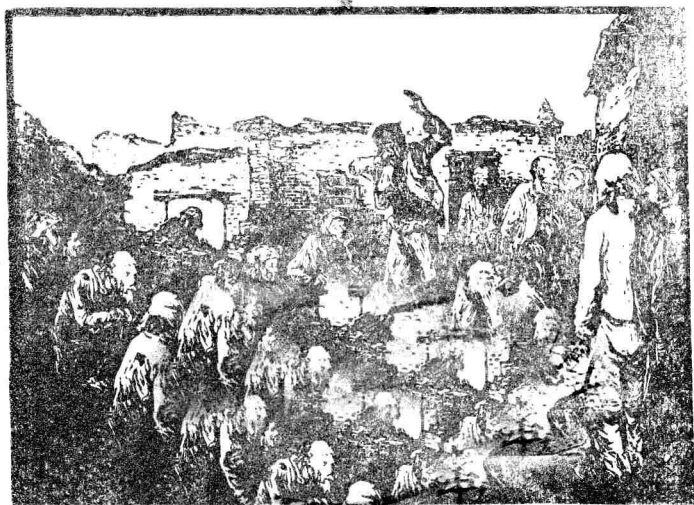


李家莊の變遷

趙樹理作、島田政雄、三好一訳

李家莊の變遷



趙 樹 理 著

島田政雄・三好一共訳

李家莊の麥遷

一九五一年一〇月二〇日印刷
一九五一年一〇月五日發行

定價二〇〇圓

訳者

島田 政雄
三好 一

発行者

吉川 綾子

印刷所

長野市鶴賀早苗町一五
しなの新聞印刷株式會社

東京都千代田區富士見町一の一〇
発行所

ハト書房

電九段(33)二一四一九
振替東京三六六二三番

序

茅^{マオ}

盾^{トン}

趙樹理^{チャオシュリ}先生は血にまみれた斗いの生活を経験してきたが、この経験の告白が、すなわち小説「李家莊^{リジャヅワン}の変遷」である。

背景は山西省北部の一山村である。しかもこの山村こそは、封建勢力のもっとも強い、中国北方の広大な農村の縮図である。この点に、「李家莊」のものがたりがもつ、普遍的な代表性がある。しかも、山西であるから、山西に不倒翁^{不倒翁}型の貪慾で狡猾無恥な地方軍閥がいて、かれ一流の、人をだまし人をあざむくやりかたをやっていたから、「李家莊」のものがたりは、その普遍性のなかに、特殊性をもっているのである。これは、ただに北中国の農村を代表するだけでなく、欺瞞と圧迫のもっともひどく、もっともふかい山西の農村を代表している。作者は、はるばると民国十七、八年（一九二八、九年）から、ものがたりのいどぐちをくりひろげている。李家莊の土皇帝は大地主李如珍^{リルチン}であり、この李如珍も、また、一コ^コの不倒翁^{不倒翁}であった。民国十七、八年から抗戦の初期にいたる、変転きわまりないこの十年かんに、山西がへてきた大小のできごとは、まことにすくなくあったであろう。しかも、李如珍は、自由自在にこれに対応し、日本人がやってくれば、かれは当然のことのよう

に、売国奴になる。だが、不思議なことは、八路軍が、この山村を回復したとき、かれ李如珍は、やはり依然として全村農民の運命をにぎっていた。八路軍が民衆運動をくりひろげ、ふかく民衆のなかにはいつていつて、はじめて、この古狸の正体がバクロされ、ここにはじめて血まみれの斗争がはじまったのである。一方は、農民を指導して抗戦する八路軍であり、一方は、抗戦を偽装して、ひたすらに反共に狂奔する地方軍閥閻錫山とその友軍であり、一方は、解放をもとめる農民であり、一方は、国を売っても、唯我独尊の封建特権をうしなうまいとする地主李如珍とその番犬である。この斗争は、長期間にわたって、いくたの変化と困難に富み、あるいは挫折し、あるいはギセイをだす。だが、人民の解放者は、経験^{経験}を總結して、教訓をえることに秀でている。さいごに、人民は勝利し、不倒翁^{不倒翁}の李如珍はついにうちたおされ「李家莊の麥^{うりか}遷^{せん}」はついに完成するのである。

趙樹理先生は、この山村のうつりかわりを何ごころなくかいたのではない。かれの愛憎は、じつにはげしくて、はっきりしている。かれは人民の立場になっている。かれは、すこしも農民の落後性（おくれたところ）をかくそうとしていない。しかも、かれがプチブル性のつよいインテリとちがうところは、農民の落後性のゆえに、農民の強固な民族意識と、恩仇のはっきりした斗争精神を否定していないことである。斗争のなかで、農民は、その落後性を克服できるだけでなく、創造の才能を発揮できる。この真理を、多くの作家は、観念の上では承認しているけれども、作品の中にそれを形象化できる作家はすくない。そのもつとも大きな原因は、やはり、かれらが、このような斗争の実生活に身を投じたことがないからである。ところが、趙樹理先生は、このような斗争に身を投じたばかり

でなく、誠心誠意、民衆にまなんだのである。

「李家莊の麥遷」は解放区生活を反映して成功した小説であるのみならず、三風整頓以後の文芸作品の到達しえた高い水準を示す一例である。このすぐれた作品は「三風整頓」運動が、文芸工作者にたいして、思想と技術の向上のうえに、どのような大きな影響をおよぼしたかを示している。思想内容については、はじめにのべたから、いま、この技術という点についても、一言するなら、大衆化をなしとげているということである。うわついた技巧や、こまかい装飾がなくて、すなおなよさ、なんともいえないゆたかなあじわいがあり、この成功は、非常な称讃にあたいるものである。これは、民族形式にたいする里程標であり、解放区以外の作家たちも手本にしなければならぬ。趙樹理先生のこの技術の獲得に、わたしは、なんの秘密もないとおもう。なぜなら、かれは人民のなかで生活し、人民のなかで工作し、人民に学んだればこそ、人民のいきいきとした、素朴な、形象化にとんだことばの粹を吸収できたのである。（一九四六年・一二・一 上海で）

現在、中華人民共和國中央人民政府文化部長。

「李家莊の變遷」を読んで

郭沫若

わたしは、また一氣に「李家莊の變遷」をよみおわった。

わたしは、これは「李有才板話」「小二黑の結婚」と同様に、すばらしいが、その規模はさらに雄大さを加えているとおもう。これは、原野に成長した一本の大樹である。

それは非常にふかく、しっかりと根をはり、おもうさま、のびのびと成長し、大氣と養分を心ゆくまですって、なにもものにもおそれず、悠然としている。

もちろん「大」といっても、いかに「偉大」であるかというようなことをいうつもりではないし、この樹は、豪華にして高貴な珍奇な種属に属するものでなくて、ありふれた杉や檜の類であり割って薪にされる青杠樹の類である。だが、それはなんらの拘束もうけないで成長したものであり、いささかのためらいも、いささかのてらいもなく、のびのびと、十分に「寒事求是」（寒事に就いて真理をとめる）の精神をあらわしている。

たぶん作者自身の希望によるものであろうが、本の表紙には「通俗小説」の四つの字が印刷されている。（その後「中国人民文芸叢書」として刊行された新華書店版には、ついていない——訳者）作者の意図し

た「通俗」は、確実に、なしとげられている。書かれているのは民衆自身の翻身うつれかわりの話であり、人物は名前までも、なんの気とりもない鉄鎖アイテス、冷元ロシマス、白狗バイコウ、二姐アエニユウの類である。しかも彼らこそ、まごうかたなき人民の英雄である。事件の発展、人物の配置、すべて自然であり、すこしの不自然さも、すこしの無駄もない。

もつとも成功しているのは、ことばである。

一人一人の人物のことばが、びったりしているばかりでなく、全体の文章が、すべて、平明簡潔なはなしことばであり、五・四いらいの欧化した新文言の臭味をすつかりぬけきっている。しかも、文法は謹厳であつて、旧式な通俗文が、章節をなさず、句切れがよくないのとはまるで違う。

章回体の旧形式（第一章、第一回式のふるい形式）はすてられている。通俗物語をかく友人たちが、ことさら好んでもちいる章回体の旧形式（第一章、第一回式のふるい形式）をつかうことは考えなければならぬ。「さて、話しかわつて」からはじまり「あとは次回のおたのしみ」におわる、講談式の口調は、すでに完全に意義をうしなっていることは、いうまでもないし、章や回の題目に二行の対句をもちいていることも、完全に旧式文人の人に媚びべつらおうとした駄じゃれであつて、けつして民衆の好みにあつてゐるものではない。わたしは、幼少のころ、章回小説をよむのに、題目ははじめからみなかったし、本文のなかでも、詩を引用したり、あるいは、四六体の文讃の類にぶつかる、とばしてよんだものである。今日なおこのような形式をまねることは、われわれの頭の上に、もういちど弁髪をくつつけたり、あるいは婦人同胞にてん足させたりするのと同じだとおもう。作者が

このような習慣をうちやぶって、あたらしい通俗文体を創造したことは、称讃にあたいることである。

作家の通弊は、通俗をおそれることである。旧式の通俗文の作者は、白話（文語文にたいする口語体文をいう——訳註）をもちいて書いていても、風雅をうりものにしようとして、詩詞文讃をとりいれ、俗でないことを示そうとするので、読者大衆とは、距離ができてしまう。五・四らしいの文芸作家は、文言（文語）を打倒したけれども、文言よりもっとわかりにくいほど欧化してしまった。特に理論の文章をかく人に、この種の病気がひどく、体裁ぶって、ひねくりまわし、半日もどうどうめぐりをしていて、しかも、一体なにをいつているのか、さっぱりわからない。この病気は、ときには、わざとやっているらしい。「文化人」「理論家」「文芸家」ぶることがやめられぬらしいのである。だから、口ではどんなにか「人民大衆のために服務する」とさけび、はなはだしきは、文章の題目さえもが、人民大衆の何とかんとかであつても、かかっているものは、人民大衆と、相へだたること十萬八千里なのだ！ わたし自身にも、この病気がある。わたし自身、文人氣質がぬきがたいのを痛感している。知識と行動は、たしかに統一することが容易でない。ここにも環境の作用がある。みんなが、おなじようにこねくりまわしている。これは、羽織・袴の社会で、一人だけ法被・股引をきるのが具合がわるいのおなじで、このような環境のなかに住まざるをえないものが、一人だけそうしない、なんだかはずかしいような気がするのに似ている。

このゆえに、わたしは、この作者が非常にうらやましい。かれは、自由な環境のなかで、自由に

びることができた。「小二黒の結婚」から「李有才板話」へ、さらに「李家莊の変遷」へと、作者自身が、まるで一本の樹のように、ぐんぐんと、たえまなく成長している。趙樹理は、うたがいのなく、もはや一本の大樹である。このような大樹は、自由な天地にあっては、かならずや、さらに長大となり、さらに数多くなるであろう。もう数年をへたならば、それこそ天地をおおう大森林となるであろう。作家がこのようであるかぎり、作品もまたこのようなものとなるであろう。

あるいは、わたしが、ほめすぎるといふ人があるかもしれないが、わたしは、言いわけしたくない。庭園の植木をみなれた人には、このような作家と作品にたいしては、よそよそしいものをかんじたり、あるいは、ひどいになると、嫌悪をかんじたりすることは疑問の余地がない。これは単純に文芸の問題でもなければ、単純にイデオロギーの問題でもない。これは民族解放斗争の全的な発展にかかわるものである。口舌の争いは、時には、いらぬものである。志ある人は、辛抱して、もう一遍、こうした作品をよんでもらいたい。そして、さらに、辛抱すよく三・四年のちの事実をみていただきたい。

(一九四六年九月十七日)

註 これは、人民共和国の成立三年前、国民党治下の上海でかかれたものである。筆者は現人民政府副総理。

李家莊の變遷

うつり

かわり



李家荘には龍王廟があつて、廟の番人を「宋じじい」とよんでいた。宋じじいにも、もとは名まえがあつたのだが、年をとってしまつたので、だれも彼の名まえをよぶものはなかつた。また、地位もひくいので、さんをつけてよぶものもなく、白ひげのじいさんも、やつと、ものをいいだしたばかりのこどもも、みんなおなじように、「宋じじい」とよんでいた。

抗戦のまえの八、九年、この龍王廟は、神さまもまつてあつた

が、村やぐばでもあつた。

修徳堂のだんなの李如珍が、村長でもあり、総代でもあつたので、宋じじいにも、ふたつのつとめがあつた——つまり、村やぐにんでもあり、廟番でもあつた。

廟には鐘がひとつかかつていて、宋じじいは、この鐘のおとをきくのが、なによりも、たのしみであつた。この鐘をつくのにも、ふたつのいみがあつた。もし三ツつけば、（しばしば宋じじいみずからついた）それは、たれかがおまいりにきたのだし、もしとめどなく、めつたつきにつけば、たれかが、うったえにきたのであつた。おまいりにくるものがあれば、宋じじいも、おそなえものにありつ

くことができたし、うったえにくるものがあれば、宋じじいも、一人まえの烙餅トビシにありつけた。

ある日、宋じじいが、ちょうど、あさめしをつくっていると、廟の門でおとがした、とおもうと、すぐつずいて、ガンガンガンと、鐘のおとがひびいた。竹のすだれ越しにみると、鐘をついてるのは、この村の学校の先生ウチノミヤシ、**春喜**であつた。

春喜は、村の人間で、本名を李耀唐リョウタウといい、修徳堂のだんなの本家の甥であつた。数年まえまでは、宋じじいも、春喜を「春喜」とよんでいたが、いまでは春喜もすでに、二十幾才にもなつており、中学も卒業し、村の小学校の先生になつてゐるので、春喜とよぶわけにはゆかなかつた。といつて、六十にかかいじいさんが、じぶんの眼のまえで、大きくなるのをみていた若ものを、むりに「先生」とよぶのも、いささか氣にくわぬところであつた。宋じじいは、鐘をついてゐるのが彼なのをみても、すぐには、どうよんでよいかわからなかつたが、ともかく、いそいで迎えにでて、鐘をつきおわるのをまて、あいさつした。

「どうぞ、中へはいつて、おかけなさい！ あんた、だれと、どんなことがおきましたかい？」

春喜は、かれのあいさつなんかには眼もくれず、一トこともいわないで、家のなかに入ると、かれにいいつけた。

「おまえ、村長のところにいつて、しらせてこい、鉄鎖テッソがわしの桑の木をきりくさつた、いつ、さばいてくれるか、きいてこい。」

宋じじいはでかけていった。しばらくすると、かえつてきた。

「村長はまだ、おきておられなかった。会は、きょうのひる、ひらくといわれましたわい。」

春喜は、『よからう』という、たちあがって、ふりむきもしないで、でていった。

宋じじいは、めしがたけると、大きなどんぶり（一ぜんで、はらいっぱいになる大どんぶり）にもりあげ、手にもって、廟をでると、かえす手で廟の門に、ようをおろし、それぞれの役と、当事者としらせてまわった。かれは、めしをくいなから、じらせてあるけなので、めしをくいおわったときには、しらせもすんでいた。いちばんしまいに、福順昌よりすやにゆき、だんなの田安橋にしらせてから、二十斤のメリケン粉をうけとって、廟へかえった。この二十斤のメリケン粉は、会をひらくとき、烙餅をつくるための用意である。いぜん、村やくばがなかったころ、村の人は、なにかがあると、総代にたのんで、さばいてもらった。さばきのときは、総代も、原告も、被告も、証人も、廟ばんも、手つだいも、みな一斤ずつの烙餅をたべ、さばきがおわってから、原告被告の、かったほうが四割、まけたほうが六割をだしあうのだった。民国になってから、そのうえに村やくばができた。そのうち閻錫山が、村のおきてをととのえると、そのうえに訴訟会というのができた。なにがどうかわろうと、李家荘では、ふるいきまりのうえに、あたらしいいきまりがくわっただけで、さばきのほうからいうと、ただ烙餅が、何人ぶんか——総代、原告被告、証人、手つだいのほかに、村長、副村長、部落長、隣組長、調停員などのぶんがふえただけである。

ひるになつて、烙餅もやけ、人もそろった。小毛という総代が、まずみんなに烙餅をくばった。修徳堂の、だんなの李如珍は、村長であり、総代でもあったし、李春喜は教員であり、原告でもあったの

で、しきたりにしたがって二人ぶん、そのほかに、二つの名目のあるものは、しきたりによって二人ぶん、一つの名目だけのものは、しきたりによって一人ぶんであった。けれども、そうでないものもあり、たとえば、宋じじいは、村やくにんであり廟番をかねていたが、これはまた、しきたりによって一人ぶんしかもらえなかった。小毛^{シヤオモウ}じしんは一人ぶんだけれども、村長が、しきたりによって一ト皿のやきたまごをたべるだけなので、そのあまりは、しきたりによって、小毛がもってかえるのである。しきたりによって、そのほか二、三人ぶんをあましておかなければならぬ。というのは、とちゅうでやってきて、なんの役もないはずなのに、喰べるのが、しきたりの人の分である。

烙餅^{ロウピン}をたべおわると、食卓をあわせて、村長が正座にすわり、福順昌のだんなの王安福^{ワンアンフ}が、調停人として、村長のとなりにすわり、そのほかのものも、みな順序によって、席についた。小毛がいった。

「はじめよう、先生、あんたが原告だ、さきに、いいなさい。」

春喜が、

「ようし、わしがさきに、いいましょう。」

といいながら、椅子をまえにせりだし、両手でたがいのそでを上にかくしあげ、背ぼねをしゃんとのばして、らんぼうに口をひらいた。

「張鉄鎖^{ヂヤンタイエス}の南の垣のそとに、わしのうちのぼろ便所がひとつある……」

鉄鎖が口をはさんだ。

「おまえのだって？」